

連載

## 社会教育施設について考える (WG 報告)

## 特別寄稿：大阪市立科学館の成立を巡って

加藤賢一（岡山理科大学）、生涯学習施設支援 WG

2017年は東洋初のプラネタリウムが導入された大阪市立電気科学館が開館して80年（つまり日本にプラネタリウムが導入されて80周年）です。その大阪市立電気科学館の“後継”施設とされるのが大阪市立科学館ですが、電気科学館廃止から大阪市立科学館設立への経緯は決して平坦な道のりではなかったようです。今回、大阪市立科学館の成立に深く関わった大阪市立科学館・前館長の加藤賢一さんに内部事情を含めて寄稿いただきました。（石坂・大阪市立科学館）

## 1. はじめに

大阪市立科学館は1989年（平成元年）10月に大阪の政治・経済の中核の一角をなす中之島で産声をあげた。かつて大阪大学理学科があり、近代大阪の文教地区と目されていたところだから場所に不満のあろうはずはなかった。しかし、多くの市民は「科学館と言えば四ツ橋」という意識が強く、「科学館は中之島」のイメージが定着するには20年以上の歳月を要した。

つまり、大阪市立科学館は四ツ橋にあった大阪市立「電気」科学館の後継施設である。したがって、電気科学館の美点を生かし、悪しきを断ち切ることが大阪市立科学館の当初の大きな使命であった。その結果、日本国内最初の科学館、日本最初のプラネタリウム館がどのように変身を遂げ、今日に至っているかを紹介する。そして、施設の設立・運営に最も大事なことは施設・運営両面の設計図をしっかりと描き、その実現を強力に推進しよう

とする体制を構築できるかで、それが成功の鍵であることを強調したい。

## 2. 大阪市立電気科学館とは？



図1 大阪市立電気科学館（開館当時）

今から80年ほど前、大正デモクラシーの雰囲気が残る大阪は商工業都市、金融都市として成長し、大動脈の御堂筋の開通、地下鉄の敷設といった大型公共事業が進められる一方、大阪城再建から美術館の創設と、文化事業も育っていった。その流れの最後に乗っていたのが地方自治体最初の理工系博物館の建設、すなわち大阪市立電気科学館の建設計画であった。

建設主体は1923年発足の大阪市電気局。路面電車を走らせるだけでなく、発電・送電事業を行っていた。10周年を迎えた大阪市電気局はその記念と、さらなる需要を喚起するため一大宣伝施設を作ろうと考えた。それは電気を使えばどんなに素晴らしいことができるかを五感に訴えるようなショールームで、美容室・大衆浴場・大食堂・スケートリンク

を備えた施設という案であった。が、紆余曲折の上、建設工事を止めて設計変更を行うというトンでもない曲芸を経て電気の展示+プラネタリウムという組み合わせの科学館に変身して昭和12年(1937年)3月に開館した。

昼でも星の見えるプラネタリウム、星の劇場は大いに好評を博した。小学生の手塚治虫や作家織田作之助、筒井康隆などが訪れ、後年、著名な天文学者になる少年たちがプラネタリウムの星に夢を膨らませたのはこの時代である。だが、この繁栄は長くは続かなかつた。開館から4年後、電気科学館は電気局という後ろ盾を失ってしまった。来るべき戦争に備え、大阪市電気局は関西配電(後の関西電力)という会社に統合され、電気科学館は大阪に残されることになったからだ。こうして、やがて太平洋戦争を迎え、昭和20年の大空襲で焼け野原となった大阪市内にあって奇跡的に生き延び、戦後を迎えることになる。

戦後復興にあたって電気科学館を顧みる余裕は大阪市にはなく、それが改善され始めたのは1970年(昭和45年)代の経済成長期に入ってからだった。この頃、各地に青少年科学館等の施設が続々と開館し、40年を迎えようとする電気科学館はいかにも古びて見えるようになった。筆者が電気科学館に採用された昭和49年(1974年)には辰巳館長が建て替え計画を立案していたが、館員の多くは冷たい反応だった。当時の電気科学館では仕事に対する後ろ向きの傾向が支配していた。混乱期に急行的に行った人員配置法の結果であり、時代遅れであることは若いプラネタリウム担当職員には良く分かったので、私たちの新館構想には職員体制の再構築が重要項目として入った。

### 3. 新館構想の誕生

1974年、大阪市立自然史博物館が新しい構

想でできた博物館として登場した。研究バリバリの人たちを学芸員とし、研究成果に基づき展示や普及教育を行うという理想を掲げていた。同じ市立とは言え、先輩格の電気科学館は素人集団で、活動の内容、質のいずれにおいても差は歴然としていたから、私たちは自然史博物館をモデルとし、来るべき日に備えて学芸員資格の取得と研究活動を行うことを目標とし、新館構想を練り上げていった。

新館構想の中心にいたのは黒田武彦さん(後に兵庫県立西はりま天文台長、兵庫県立大学教授)で、それに筆者と故・岡岡秀多さんが加わった。豊富な科学資料と調査研究を基礎とし、それを踏まえて展示や普及活動があるという自然史博物館の科学館版ができた。黒田さんは天文台が博物館となるのが理想で、プラネタリウムは邪道とし、筆者は普及活動の強力な武器がプラネタリウムで今や天文普及に欠かせないという立場であったが、さしたる違いはなかった。黒田さんのアイデアはやがて西はりま天文台で実現することになる。

### 4. 思いもよらぬ計画の浮上

一介の職員に過ぎない私たちの案が館の外に出る機会は無かった。そんな中、関西電力が科学館を寄付するという話が舞い込んできた。当初はJR環状線弁天町駅周辺の開発事業とセットで、それが間もなく環状線の反対側の扇町再開発地区へと変更された。こうして経済局が寄付の受け入れ先となったが、どうもしっくり来ないと思ったか、教育委員会に話を回して来た。この頃には建設場所は大阪大学理学部の跡地と決まった。

寄付話は電気科学館とは無関係に進んでいたもので、まず私たちは電気科学館の後継と位置付けるべく運動し、自作の構想案を入れ込むことに努めた。しかし、時は既に遅し、で、教育委員会に回って来た時には設計はほぼでき上がり、建設開始直前だった。関西電力が

全て作ってから寄付をするということだった。教育委員会は展示構想委員会を作ることで一定の水準を保つべく務めたが、大枠については変更できる余地は少なかった。

## 5. 設計図を見て

当初の案ではプラネタリウムも望遠鏡も、そして多分、天文・宇宙関係の展示も無かった。そこで、教育委員会はこれらを入れ込むことに努めていた。私たちはこの段階で修正設計図を目にすることになって、哑然としてしまった。

建物はショッピングセンター風で、4階分の全フロアーがオープンで仕切りがなく、外観が楕円状と博物館的には難しい構造だった。その上、職員用のスペースは5人分、収蔵庫や倉庫スペースは全く無しで、驚きを超えて怒りが湧いてきた。聞いたら、某科学館の職員は5名だったという。それは本社職員が5名ということで、派遣職員25名はカウントしなかったという後日談には恐れ入った。何とか20名分ほどの職員スペースへの拡張と機械室の書庫への改造を承諾してもらった。プラネタリウム等の追加と併せて経費は30%増しになった。

## 6. 新科学館になって

1989年9月、電気科学館職員が開館準備のため新科学館に移った。私たちの居室は集会・教室スペースを区切って作った。プラネタリウム、全天周映像装置オムニマックス、4階1,400m<sup>2</sup>に80点の展示品、天文台、書籍、これらが4名の天文職員の担当であった。タクシーで帰宅する日々が続き、皆が疲労困憊していた。

9月30日、全員が電気科学館の任を解かれると同時に黒田さんが退職し、西はりま天文台建設のため異動した。翌日、新たに発令が下りて、天文職員3名は学芸員職に切り替え



図2 大阪市立科学館（開館当時）

で、他は元通りであった。こうして、電気科学館の大きな課題であった人員体制は一新され、学芸員を中心に運営していく方向性が打ち出された。

同時に、新科学館は新たに作った財団法人に管理を委託することになり、私たちはそこに出向となった。中曽根臨調の財政健全化計画に沿って第3セクターがたくさん作られた時代であった。

スペースの問題はどうにもならず大量の資料を電気科学館に残さざるを得なかった。その後、駐車場の一角にプレハブ倉庫を建て、廃校教室を借りて倉庫にし、事務室の上に2階を建て増して見学者の休憩スペースにと、それなりに工夫はしたものの、スペースは今も頭の痛い問題である。

展示品には涙が出た。3,000m<sup>2</sup>の展示場をどういう資料で埋めるのかと想像していたら、全部作り物、それも多くは看板だった。宇宙科学の専門家というプランナーはブルーバックスを数冊読んだ専門家だったし、展示業者に実物資料のあろうはずもなく、作るしか方法がなかったに違いない。初めから私たちが計画に参画していればそんなことにはならなかった筈だが、大阪市は寄付者に全部作ってから寄付してくれと言っていたのだから、寄

付者に責任はない。ここにも大きな教訓があると思う。

展示場へ見学者を送り出すのが辛かった。張りぼての太陽像や4つの力などという用語をパネルで見せられては、理解どころではないし、むしろ、腹が立ってくる。そんな展示物で埋められていたから、市の上層部が見学に来て「あららら…」と絶句する始末だった。思い描いていたイメージと余りに違っていたのだろうし、それは一般見学者の気持ちでもあった。

### 7. 早々の展示更新計画

科学館の展示品は消耗品である。常に更新は避けられないのでそれは織り込み済みだったが、計画を前倒しし、10年で全展示品を入れ替える方針を作った。資料収集には時間が足りなかったが、それでも改善される。何とか予算の目途がついて実現することができた

のは幸いだった。見学者の反応も前とは全く違い、上々だった。

しかし、こんな例はあるのだろうか？15億円の展示品を10年で捨てるを得なかったのである。何か間違っていた。

当時最新式とされたコンピュータ制御のプラネタリウムの老朽化も早かった。と言うより、コンピュータ制御技術は生まれたばかりで、私たちの要求に応じきれなかった。これは15年で更新である。同時に全天周映像装置オムニマックスを止めた。一方向ドーム内の前席で見せられたら、映像の内容が分からないだけでなく、目や頭が痛くなるだけだった。

本特集は現状を紹介するものでないことは承知しているが、現状を規定している大きな要素が設立当初にあることから敢えて触れさせて戴いた。

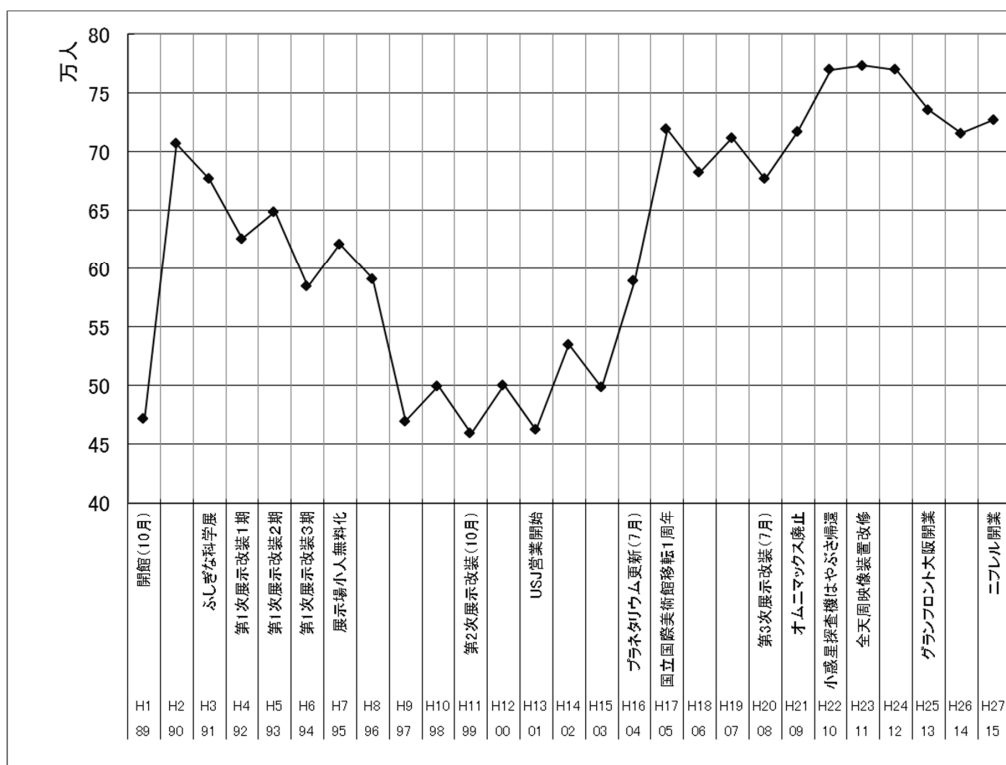


図3 年度ごとの大阪市立科学館の総入館者数（主な出来事を下欄に付記している）

## 8. 指揮者はだれか？明確なコンセプトを

電気科学館のヘリオスタットを移設、転用するようお願いした。それで、できたのは良かったが、全く使いものにならず、早々にこれも捨てざるを得なかった。設置場所は屋上である。建物構造上、その場所は限られてしまう。屋上直下が4階展示場なので直下に光路をとれば難なくできるが、展示担当者はそれを承知せず、当初の計画通りに長い光路長をとれと言う。ヘリオスタットと望遠鏡の間が長くなると太陽と同時にヘリオスタット鏡にもピントが合ってしまう、鏡の汚れやごみが見えてしまう。そんなことは経験済みだからダメ出しをしたが、担当者は寄付者の命を盾にがんとして受け付けない。その結果、言われた通りの仕様ででき上り、結果、数年で廃棄された。これは誰に責任があるのか、それとも誰にも責任はないのか。いずれにしろ、間違っただけの指揮命令系統の悲劇と言うべきだろう。結果として寄付者の思いに傷をつけたことは間違いない。

以上は一例であるが、展示品を見ても、バックヤードを見てもとてもちぐはぐで、建物自体も博物館向きではない。結局のところ、何をどうしたいのか、というコンセプトが欠如していたためこうなるとしか思えなかった。

途中で様々な人間が介在するとややこしくなるから全部作って寄付してくれと大阪市は言い、寄付者は建物+展示品と分けて丸投げ状態で発注した。担当者にアイデアがあるわけなし、抽象的な言い回しで注文するものだから、業者は目映りの良さそうな案を提示する。でき上がったものはおよそ博物館施設らしからぬものだが、担当者にはそれを判断する能力はない。時間もないし、そのままゴーを出す。すると、教育委員会がごちゃごちゃ言い始めたから、少しはそれも入れないと、といったことで開館を迎えたというのが真相

だろうと思う。

残念ながら、ここには博物館や科学館を作ろうという明確な意志は認められない。これが大阪市立科学館の一番の教訓だと思う。寄付者はこれまでも各地で同様の施設を作って寄付してきたから、いつもの手法でやったのかも知れない。それで完結したら問題はなかったのだろうが、大阪市には先行の電気科学館があり、多少、博物館を知っているスタッフもいたことで他とは違っていた。だが、結局、電気科学館の資料もノウハウも新館建設には全く生かされることはなく、電気科学館のそれより程度の低いものが並ぶという奇妙なことになってしまった。

こうした作り方は、やはり、良いとは言えない。むしろ、こんなやり方は間違っていると言うべきである。各専門的な施設についてはそのノウハウや理論ができていた昨今のことである。本の背表紙のコピーを並べて図書館ですとは言えないように、イラストの看板を並べて科学館とは言えない時代である。

館名に中身を合わせるのに私たちは15年かけることになった。経費も半端ではない。まだ予算に多少の融通がついた時代だからできたが、壮大な無駄を重ねてしまった。しっかりしたディレクターを一人据えればこんな無駄をしなくても済んだ筈である。もっともおかげで私たちは生きた勉強をさせて戴いたわけだが、惜しむらくはこの経験が2度と生かせないことだ。いや、いや、そうではない。こんな経験は生かさないことが幸せというものであろう。

筆者が大阪市立科学館を離れ、丸3年が過ぎた。舌禍はいつものことだが、もし本稿に不快感を抱かれた方がおられたなら白髪頭に免じてお許し願いたい。

加藤 賢一